

学位論文審査の結果の要旨

報告番号	先端科学技術甲第 178 号	氏 名	小西 千秋
論文題目	都市空間と大学キャンパスの類同性から見た キャンパス非建蔽地における空間形成の対比的研究		
論文審査委員会	委員(主査) D○合 土田 寛 教授 (建築・建設環境工学専攻) 委員(副査) D○合 伊藤 俊介 教授 (建築・建設環境工学専攻) 委員(副査) D○合 山田 あすか 教授 (建築・建設環境工学専攻) 委員(副査) D○合 横手 義洋 教授 (建築・建設環境工学専攻) 委員(副査) 齋尾 直子 教授 (東京工業大学 環境・社会理工学院 建築学系)		

研究の背景

都市のパブリックスペースは多様な主体が都市活動を営む。しかし、パブリックスペースを効率的に運営するために組織、施設が細分化され、道路法や都市公園法等、独立した根拠法を持つ中で道路、公園、建物用地を個別に制御している。公共の用に供することを目的として一見連続的な空間になっているものの、明確な施設区分が存在し、平面的に分断されていることは否めない。一方、大学キャンパスは都市空間が有するような主体別の施設・空間区分が存在しない。そのため、教育・研究を目的としつつも、生活空間として通路や広場等を柔軟な形成を可能とする。大学キャンパスのオープンスペースを分析することが、良好な市街地環境や景観の創出に向けた有用な知見になる可能性が考えられる。

研究の目的

大学キャンパスは大規模土地利用であるが故に、教職員や学生、多くの人が集まり、働き、暮らすことにデザインがなされ、敷地内部に人が移動する空間や滞留する空間を構成する。これらの空間は都市における道路と道路に区画された公園に類似する構成を有している。このようなキャンパスと都市の類同性を前提として、都市空間と対比的にキャンパスの空間構成に対する分析を行っている。本論文の特色は、道路と道路に区画された公園のように都市のパブリックスペースで見られる空間構成の視点を用いて、キャンパス非建蔽地におけるオープンスペースの構成を検証する点である。これは、管理主体の細分化等によって行き詰まる都市のパブリックスペースに対し、キャンパスのオープンスペースにおける柔軟な空間形成から広く都市再生に向けた知見を導入することが目的である。

研究の内容

本論文はキャンパスのマスタープラン及びキャンパスの非建蔽地の特性等を分析・検証することで、計画から空間デザインまでを通して空間形成に関する研究を行うものである。

将来像を示すマスタープランにおける都市とキャンパスとの対比では、都市部においてキャンパスと市街地が連坦する認識が都市マスタープランに表示され、非建蔽地で周辺地域に対応する方針がキャンパスマスタープランに示されることから、非建蔽地において都

市空間とキャンパスが連坦する可能性があることを論点として導出している。

続いて、都市空間とキャンパス空間の対比では、パブリックスペースの分節で用いられる物理的な境界線によってキャンパスの非建蔽地の分節を行い、機能種別によって空間を分類している。これらの空間には都市空間の道路に類する通路空間、公園に類する滞留空間が存在し、都市空間と同様に街区を構成していることが確認された。

ここで、通路空間及び滞留空間をオープンスペースとして捉え、動線との関係から線的オープンスペースと面的オープンスペースに整理している。それらのオープンスペースの構成によって5つの類型を導出している。キャンパスを都市空間として、非建蔽地を道路に類する空間と公園に類する空間に捉え、その空間構成を確認する手法が提示された。

これらの類型に対し、空間認識実験から利用者の認識を検証することで各類型の特性を分析している。キャンパスの内部において建物に囲まれたオープンスペース、軸線的な働きを有するオープンスペースは線的、面的オープンスペースが一体的に認識する状況が確認できる。また、開放されたオープンスペースにおいて、周囲の道路を線的オープンスペースのように利用することで、都市空間である道路との一体的な空間を形成する構成が見られる。一方で、都市空間のように線的、面的オープンスペースを分離することで、滞留や移動の判別が容易となり利用者にわかりやすい空間を形成する。加えて、キャンパスは拡張等に合わせて有機的にオープンスペースを接続しており、線的、面的オープンスペースが一体的な空間構成と分離的な空間構成の共存する構成が存在する。これらの成果は、

- [1] 小西 千秋, 土田 寛, 本多 由佳, 東京圏都市部大学キャンパスにおける非建蔽地の空間構成と空間認識 -大学キャンパスと都市空間の類同性に着目した空間特性の対比的分析論文タイトル-, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 88, No. 803, pp. 191-202 (2023. 1).

としてまとめられている。

以上より、キャンパスの非建蔽地は都市空間の道路と公園に類似する特性を有し、キャンパスの特徴的な状況として道路に類する線的オープンスペースと公園に類する面的オープンスペースが一体的な空間を形成することが確認された。都市空間は道路、公園のように管理主体で区分し、非建蔽地としてまとめて捉えることがないことに対し、キャンパス空間は通路や広場をまとめて非建蔽地として捉えることが可能である。都市空間における分断の解消には非建蔽地として一体的に捉える考え方が必要となる。本論文が明らかにしたキャンパス非建蔽地の空間構成は、都市空間との類同性を有しつつ、柔軟な空間形成を可能としており、都市空間とキャンパスの連坦が可能であることを示している。これは、都市空間形成における行政と住民、行政間、住民間というあらゆる主体間調整に必要な空間意識の醸成につながる有用な視点を導出しており、良質なパブリックスペースの創出に極めて有効であると判断され、十分に評価できる。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。